

Chitose
Uenara

上原 千登勢

産業情報学部 産業情報学科 講師

英語資格試験を受けてみませんか？

ますますグローバル化してゆく社会において、英語教育の需要も年々増加しています。高校生や在学生のみなさんにも「英語を学びたい」と考えているかた、すでに今学んでいるかたもいるでしょう。自分の英語力を確かめるために、各種英語資格試験を受験したこともあるのではないのでしょうか？今回は、TOEIC満点(990点)を20回以上取得している上原千登勢先生(産業情報学部)に英語教育やTOEIC対策についてお話を伺いました。

英語講師になろうと 思ったきっかけは？

私は小学校から高校までをロサンゼルスで過ごしました。高校卒業が近づき進路を考えるにあたって、まずはアメリカの大学に行くのか、日本の大学に行くのかを悩みましたが、いろいろ考えた結果、日本の大学に進学することにしました。そこで、英語の教職課程を受講したりして、漠然と「英語を教える」仕事ができればいいと思うようになりました。大学卒業後はホテルに就職し、その後も数年はいろいろな仕事を経験しました。しかし、やはり英語を教える仕事がしたいという想いがあり、言語学を学ぶため、ニューヨークにある大学院に留学して修士号を取得しました。ニューヨークから帰国後は、外資系企業で専任の英語講師を務めたり、大学で非常勤の英語講師をするなどして、英語を教える仕事を続けてきました。

英語資格試験対策の講義を 担当されていますが、各試験の 特徴などを教えて下さい。

「TOEIC」は大学生や社会人向けで、就職活動時に自身の英語力を示すためであったり、企業が昇進や配属部署を決定する場合の判断材料に使われたりするケースが多いです。問題の内容もビジネスシーンを想定したものとなっています。一般的にTOEICというと「TOEIC L&R」のことを指しており、Listening(聞く)とReading(読む)にて英語力を測定します。160カ国で年間約700万人も受験していると言われており、世界共通の英語試験とみることができるといえます。「TOEFL」は主に留学生の英語力を図るために用いられます。アメリカやカナダに留学する際には必要となり、スコアによって入れる大学や大学院がかわってきます。150カ国で利用され、年間の受験者数は約70万人(推定)と言われています。「IELTS」はTOEFLのイギリス版といった感じで、イギリスやオーストラリア、ニュージ

ランドなどへの留学の際に使用されることが多いです。140カ国、10,000機関が認定しており、年間約300万人が受験しています。「英検」は日本国内では非常に認知度の高い試験で、一次試験・二次試験を通して4つのスキル(聞く・読む・書く・話す)が試されます。受験者数も年間約360万人とされており、国内の検定試験ということを考えればかなりの規模といえます。しかし、TOEICなどのように全員が同じ問題を解き、そのスコアが指標になるわけではなく、ご存知のとおり、級(レベル別)で受験することになります。その級によって難易度が大きく異なるため、英語力は上がってきても特定の級にいつまでも合格できずに挫折してしまったり、海外では評価対象になりにくい、などのデメリットは少しあるように思います。

英語資格試験の中でも特に TOEIC対策に力を 入れようと思ったきっかけは？

外資系企業で英語講師をしているときに、TOEIC対策もしてほしいと言われて、初めて集中的にTOEICを教えることになりました。それからしばらくして「TTT(TOEIC Teachers' Training)」というTOEIC指導者養成講座に参加する機会がありました。それがターニングポイントだったかなと思っています。この講座は、毎回全国の現役TOEIC講師や英語教員が集まりTOEICのアプローチ・教え方を座学・レクチャーだけでなく、時には学習者の立場になって考えたり、ティーチング演習や問題作成などの課題を通して身につけることを目的としています。参加するには審査があり、全員TOEIC受験経験があり、かつ高得点保持者で、現在TOEICを教えている、もしくは教える予定があることが条件となっています。昨年(2018年)の10月・11月には、第16回のTTTを本学で開催することができました。初の東京以外での実施、そしてもちろん県内初の開催となりました。

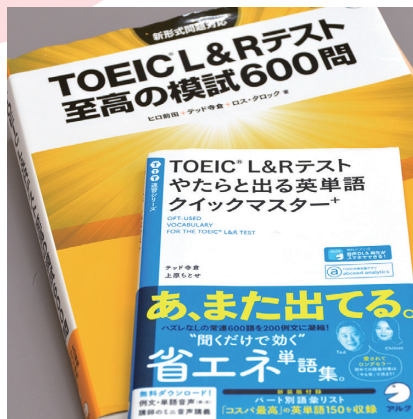


私はこのTTTを受講してTOEICの奥深さや楽しさを知りました。教え方というのは、対象によって変わってきます。それが大学生なのか社会人なのか、社会人でも新入社員なのか中堅社員なのか。また地域によっても違うと思います。私はせっかく沖縄にいますので、沖縄に合ったTOEICの教え方を考えていきたいと思っています。本土では点数重視の考え方が強いですが、「最短距離で効率的に教えてほしい、無駄なことは必要ない」といった感じで。特に社会人の方はTOEICのスコアが仕事につながったり、それによって昇進がかかっていたりすることもありますのでそういった考え方になるのは当然だと思います。しかし、沖縄ではまだそこまでTOEICのスコアが重視されることがないせいか、「点数を取りにいけど」というより、みなさん「楽しく学ぶ」、「インタラクティブに学ぶ」ことを求めているように思います。授業でそういったことを実践したところ、受講生の満足度も高まり、自然と点数もついてくるようになったと感じています。

TOEIC対策として、具体的に学生にはどのようなことを教えているのですか？

講義の中では、アクティブラーニングを取り入れていて、なるべく学生にタスク(課題)を通して、

学びや新しい発見が得られるようにしています。例えば、TOEICの問題を学生に作らせるということをしているのですが、問題を作成することで、学生は選択肢の中にただ正解を配置するだけでなく、不正解の選択肢についても考えなくてはなりません。作成側の視点に立つことで、問題を解くだけでなく、正解不正解の根拠をしっかりと理解できるようになります。あとは、ボキャブラリー(語彙力)のテスト対策などが、どうしても暗記だけのつまらない作業になりがちなので、ピア・ディクテーション(peer dictation)というものを取り入れています。学生にペアを作ってもらい、一人が例文を読み、もう一人がそれを書く、というものです。これをさせることによって、学生たちは発音を気にしなければいけないので、教材の音声もしっかり聞くようになりますし、スベルも気にするようになります。また、教員だけでなくペアの学生からの評価も受けるため、モチベーションの向上にも繋がっているようです。それから、TOEICは200問出題されるのですが、難易度の高い問題から易しい問題まであります。自分のレベルに合わない難しい問題にあたるたびに、時間を費やしてしまっただけで、点数がとれたはずの易しい問題を解かずして試験は終了してしまうので、自分の本来の実力を出しきっていないことになります。これは英語力の部分ではありませんが、このような細かいテクニックも学生たちには教えています。



日本人が英語学習を行う上で、何か考えるべきポイントなどはありますか？

個人差がありますので、一括りにはできませんが、よく言われているのは「英語を話す」という機会を自ら作って、積極的に話すことが大事だということです。今の時代「インプット」はいくらでもできると思います。インターネット上で英語の記事を読んだり、英語で情報収集をしたり、YouTubeでたくさんの英語の動画をみることもできます。自分の興味と繋げて、例えば洋楽を聴いたり映画を観ることで学習することもできます。しかし、「アウトプット(自分から話したり発信したり)」が不足していると思います。外国語を話すとき、間違えることに對してどうしても恥ずかしさがでてくると思います。しかし、ちょっとした勇気やきっかけでそこを乗り越えることができれば、楽しくなって、自信がつき、モチベーションも上がり、さらに学習したくなると思います。

それから、できれば留学はしたほうがいいと思います。言葉を学ぶこと以外にも、その土地の文化に触れることができるという体験は非常に大切です。留学にもいろいろな形があります。年単位の長期のものもあれば、夏休みを利用した短期間のものもあります。極端な話、旅行でもいいと思うんですね。学生のうちはたくさん時間がありますので、そこは有効に活用して欲しいと思います。学生からはよく「お金が、、、」という声を聞くのですが、それを理由にしてしまうのは少し違うかなと思います。私もニューヨークの留学(大学院)の前に三年間仕事をしてお金を貯めてから行きました。目標のためですから、アルバイトをする

なり、奨学金に採用されるための努力などは必要だろうと思います。

英語に関心のある高校生や在学たちにメッセージを。

英語は世界の公用語ですから、英語ができるようになれば、まず単純に「楽しい」です。例えば何が調べものをするにしても、得られる情報は何倍にもなりますし、母国語が違う人同士でも英語を通してコミュニケーションがとれます。いろいろなことが変わって、本当に人生が豊かになります。まずは、少しでも英語に触れていてもらいたいと思います。あとは学習が進んでいけば、ぜひ資格試験を受けて欲しいと思いますね。試験を受けるとなると、「試験日」が決まります。いつまでにどの程度の英語力が必要になるかが明確になりますから、目標設定がしやすく、モチベーションも上がると思います。TOEICで高得点を取得したり、英検で上位の級を取得するなど、資格試験の結果が評価に繋がることはもちろんですが、その過程にもたくさんのメリットがありますので、自分の状況や目標にあった試験を見つけて、ぜひ活用して欲しいです。



上原 千登勢

うえはら ちとせ

産業情報学部 産業情報学科 講師

小中高の12年間をロサンゼルスで過ごし、高校卒業後に帰国。日本の大学を卒業後、ニューヨークのコロンビア大学大学院ティーチャーズカレッジにて修士号を取得。様々な英語教育の現場を経て、2015年度に本学産業情報学部専任教員として着任。担当科目は「英語VI(英検対策)」「英語VII(TOEIC対策)」「ビジネス英語」「グローバルメディアスタディーズ」、「国際理解課題研究Ⅰ・Ⅱ」など